

# 構造的ソーシャルワーク理論形成初期の研究

田川 佳代子

## I. 課題提起

本研究は、“伝統的”、あるいは“因襲的”と呼ばれるソーシャルワークとは一線を画す、構造的ソーシャルワークに関心がある。構造的ソーシャルワークとは、もっと人間のニーズに敏感であることが社会の中心的な価値に据えられるような代案としての社会的ビジョンを前提に、既存の社会秩序から生ずる社会問題を分析的に記述し、階級・ジェンダー・人種・性愛志向・障害等によって人々を差別する社会制度体系を見直し、社会的な変革を目標として行われる実践である (Mullaly 1997: 104)。

現在の社会秩序から噴出する失業や貧困、それから派生する様々な社会的諸問題を目の当たりにしながら、社会問題を分析し、その原因を解明し、その問題解決に向けて、問題をもつ個人への対応だけではなく、問題が生みだされる社会構造へアプローチする実践として、伝統的／因襲的なソーシャルワークは効果的に動作してきたとは言い難い。

ソーシャルワークは一体何のために行われるのか。何をめざしているのか。ソーシャルワークが働きかける実践の焦点はどこにあるのか。このようなソーシャルワークの大義を尋ねる問いは、わが国の社会福祉士として国家資格化された養成課程に設置される専門科目の「社会福祉援助技術」のディスコースからは、ほとんど省かれてきた。

わが国における主流派のソーシャルワークは、「ソーシャルワークは対人援助サービスである」という大前提に立ち、現在の社会的諸施策がつくられる政策の基本的枠組にある価値観やイデオロギーが、ソーシャルワークの目的や意味に照らして本当に相応しいものかどうかを問う視点をもたない。

しかし、ソーシャルワークが対応を迫られる社会的諸問題というのは、資本主義社会や家父長制といった現在の社会秩序を形作る社会構造に起因するものであり、人々のもつ意識や経験はそれによって形成され、規定され、支配されている。個人的諸問題と社会的諸問題の相互作用にある構造的なつながりや、経済的、政治的、社会的に絡み合う諸関係や権力の布置を分析的に捉え、もっと人々の気づきや意識を高め批判的思考を発達させるアプローチが必要である。

ソーシャルワークは、格差社会や新たな貧困と呼ばれる社会問題を生み出す、現在の社会構造システムを維持するために用いられるものとして規定され存在しつづけるのか。それとも現状に異議を唱え、現在の社会構造を変えていくために働きかけるものとなるのか。Mullaly (1997: 163) は、そのどちらにしても、ソーシャルワークのもつ政治的な意味合いへの気づきをもっと促される必要があると主張する。

構造的アプローチは、カナダで発展してきたソーシャルワーク理論である。構造的ソーシャルワークは、今日のカナダのスクール・オブ・ソーシャルワークにおいて、公式に表明される教育プログラムの中心に位置している。構造的ソーシャルワークは、伝統的／因襲的ソーシャルワークとは一線を画す理論的基礎を土台として展開される。それは伝統的／因襲的ソーシャルワーク実践とは異なるソーシャルワークの目的や働きを説明する。

本稿は、構造的ソーシャルワークの先駆けとなった研究に遡り、新たなパラダイムの萌芽がみられた時代のソーシャルワークの理論形成を振り返ろうとするものである。そこから構造的アプローチの独自性として数えられるものを探求し確認にしていきたい。カナダで発展し、今日のカナダのスクール・オブ・ソーシャルワーク

の教育プログラムの柱に据えられる構造的ソーシャルワークについて検討することは、わが国におけるソーシャルワーク教育を批判的にとらえ返し、代案としての教育プログラムを創造していく課題提起につながるものとする。

## II. Maurice Moreau の先駆的研究

Mullaly (1997:105) によると、ソーシャルワークに対する構造的アプローチの最も発展的な仕事はカナダで行われてきた。先駆者となったのは、Carleton 大学スクール・オブ・ソーシャルワークの Maurice Moreau である (Moreau 1979; Carniol 1992)。

Maurice Moreau は、Carleton 大学の同僚たち、Peter Findlay、Helen Levine、Roland Lecomte、そして Allan Moscovitch から多くの示唆を得て、彼の論文にみられる主な考えを明確化した。また、Montreal 大学教授の Gisele Legault and Pierre Racine の独創性に富む発想から、ソーシャルワークに対する構造的アプローチを発展させた。さらに、実践アプローチのパラダイムを洗練し、構造的アプローチの理論的基礎を発展させる際に、英国の Warwick 大学教授 Peter Leonard (1975) の論文が、役立てられた (Moreau 1979:91)。

Moreau (1979:78) による構造的介入は、人と状況を二分するのではなく、人々と特定の社会的、政治的、経済的状況の間の交互作用にもっと注意を向けようとするものである。それは、人々を受け身の依存的な状態におき、状況よりも個人に注意を向ける医療・疾病モデルに基づく伝統的なアプローチとは対照的なものである。構造的ソーシャルワークの主たる関心は、社会における特定の階層の人々に限定された経済的不平等の不正義にある。また経済的不平等の明らかな犠牲者だけでなく、現在の社会秩序を支持し、維持し、合法化するイデオロギーの犠牲者や、それに抵抗し、心理的にダメージを被っている社会集団に対してもまた関心を注ごうとするものである。構造的ソーシャルワークの中心的な関心は権力におかれ、個人的なもの、政治的なものの両方にある。

Carniol (1992) は、Moreau がエイズによる合併症で亡くなった後、Moreau の未完成のままとなった原稿と彼との対話を基に、Moreau のソーシャルワークに対する構造的アプローチをとりまとめている。そこでは専門職の実践は社会の経済的、政治的諸力によって深刻に影響されていることが述べられ、西洋社会は家父長制、資本主義、異性愛主義、人種差別主義、その他の抑圧の絡み合わさった体系的な根っこに起因する不正義への不安

と無関心がない混ぜになったものを生み出してきたと述べる (Carniol 1992:2)。

構造的アプローチの独自性の1つは、階級主義、人種主義、家父長制、異性愛主義など、抑圧の様々な形態の優先順位のリストをつくることではなく、むしろ抑圧の全体的体系を形成する様々な点で相互に交わる共通領域と捉えられるところにあるといわれる。そしてもう1つの独自性は、社会制度にのみ働きかけるのではなく、個人的なものや政治的なものをつなぎ、諸個人や家族、諸集団や地域と働くための知識や技術を求めるジェネラリスト・モデルの実践という点にあるといわれている (Mullaly 1997:105)。

構造的ソーシャルワークのアプローチは、1970年代半ばから、カナダで、1970年代後半そして1980年代にかけて発展し、Moreau は1990年に亡くなるまで、この主題を研究し執筆し続けた。構造的ソーシャルワークは、Carleton 大学のスクール・オブ・ソーシャルワークの統合的部分でありつづけている (Mullaly 1997:105)。

カールトン大学におけるスクール・オブ・ソーシャルワークは、構造的ソーシャルワークの発展において中心的な役割を果たしてきた<sup>1)</sup>。

カナダでは、少なくとも、その他に4つのスクール・オブ・ソーシャルワーク (St. Thomas University in Fredericton, New Brunswick, the Maritime School of Social Work at Dalhousie University in Halifax, the University of Northern British Columbia and the University of Victoria) において、構造的な志向あるいは、構造的な志向・フェミニズム志向の2つを表明している (Mullaly 1997:105)。

## III. 新たなパラダイムの萌芽

### 1. ラディカル・ソーシャルワーク

カナダにおいて構造的ソーシャルワークの先駆者となった Carleton 大学の Maurice Moreau の論文を読むと、英国の Peter Leonard (1975) の論文が、構造的アプローチの理論的基礎の発展に寄与したとある (Moreau 1979:91)。

Peter Leonard (1975) は、ラディカル・ソーシャルワークの立場を主張する論者である。ラディカル・ソーシャルワークの伝統は、構造的なソーシャルワークの理論的基礎を構成する重要な1つの要素と考えられている (Mullaly 1997:99)。

英国の Bailey and Brake (1975)、合衆国の Galper (1975)、オーストラリアの Throssell (1975)、これらラディカル・ソーシャルワークの実質的内容を表す文献は、異なる3つの大陸の英語圏で、1975年以降、世界

同時的な経済不況と国家財政危機の時期に一致して出版されている。このことを、Mullaly (1997:106-7) は、支配的パラダイムが変則異常を避けられない事態に競合するパラダイムが出現し始めることに照らして、伝統的／因襲的ソーシャルワークの代案的アプローチが3つの異なる大陸で同時に現れたのは偶然の一致ではないと述べる。

Maurice Moreau は、P. Leonard (1975) の論文に示されたラディカル・ソーシャルワークのパラダイムを、伝統的／因襲的ソーシャルワークのパラダイムの代案として、それを構造的アプローチの理論的基礎に応用した。次にそのパラダイムの構成要素についてみてみることにする。

## 2. パラダイムの構成要素

Peter Leonard (1975) による、ラディカル・ソーシャルワークのパラダイムは、次ぎの3つの要素から構成される。すなわち、1) ラディカルな社会システム論、2) 個人・家族・集団・地域・居住施設・組織と共に働く統合的アプローチ、3) 批判的意識の発展的アプローチである。

### 1) ラディカルな社会システム論

P. Leonard (1975) によれば、ソーシャルワークや社会福祉制度は、発展する特定の社会的・経済的基礎を反映するものであると同時に抑圧的な機能をもつとみられる。そのイデオロギーの基礎構造や政治的目的は、福祉受給者ばかりでなく、ソーシャルワークの実践者にも隠ぺいされる。ソーシャルワークは、クライアントの自己決定や個人の尊厳といった価値を含めて、人道主義を宣言する傍ら、そのことを無効にする資本主義のもとにおかれ、体系それ自体に反駁を抱え、混乱やごまかしが生まれる原因となっている (Peter Leonard 1975:46)。

P. Leonard (1975) の論文の背景には、マルクス主義の視点に基づいた社会システム分析がある。社会システムの相互連結や、広範囲の諸変数間の対話的な関係を認めるものである。政治的社会的制度の「上部構造」「土台に対して建物」「ある原理に基づく哲学体系」(superstructure) とそれらを正当化するイデオロギーは、経済的生産の「基礎構造」「土台」「社会的生産基盤」「恒久的基幹施設」(infrastructure) との相互作用も認める。この相互作用は、互いに影響的なものであるが、そこでは経済的な基礎構造に重みがかかけられている。伝統的なシステム・モデルでは、決定的な諸変数であるものについて巧みに論点を避けるのに対し、ラディカルなシステ

ム・モデルでは、原因結果の明確化を試み、ソーシャルワーカーがとるべき行動を道案内する (Peter Leonard 1975:48)。

ラディカルなパラダイムでは資本主義経済や競争社会からもたらされる物質的、身体的、情緒的圧力による個々人の犠牲に対して、ソーシャルワークは、諸施策を通して対応し、統制の役割を担ってきたとされる。個別化された実践の視点は、結果としてソーシャルワークにおける裁量的なやり方を発展させ、個人や集団、そしてより広い社会的脈絡のつながりという点で、ソーシャルワークの認識を断片化してきたと指摘される (P. Leonard 1975:49-50)。

Moreau (1979) は、構造的なアプローチのアセスメントでは、支配的イデオロギーや経済的脈絡において犠牲者とされる人々を、社会的機関が「逸脱者」や「個人的問題」として非難するのではなく、ソーシャルワーカーと彼らとの間にある不可避的な権力の不平等な関係をできるだけ縮小する方向で働きかける実践について述べている。それは専門職主義や援助技術の神秘性を取り除き、スキルを共有し伝えることを奨励するものである。

同様に、構造的アプローチの援助計画では、問題の個人的、対人的な側面が扱われ、制度的、政治的要素は省かれるという限界や、ソーシャルワーカーの価値観やバイアスも事実として認めることが促される。そして、クライアントへの記録の開示、クライアントが同席したうえでカンファレンス、機関方針を計画する際にはクライアントが参画するなど、クライアントへの説明責任を最大限に保障していくような支援が述べられる。個人的相談の限界に直面し、分断された人々が、同じ問題を抱えている人々どうし集まりを持って組織的に結びつき政治的に参画していく道筋が描かれている。

### 2) ソーシャルワークの統合的アプローチ

P. Leonard (1975:51) は、統合的アプローチを発展させ、ソーシャルワークの全体的な概念化を可能にするものとして、Pincus and Minahan (1973) と Goldstein (1973) の業績をとりあげている。ラディカルではない著者の業績を利用することについては、そこに含まれる危険性に気づいている限り、それを拒む理由は何もないと述べた上で、彼らの業績を通してみられる社会の階級分析の欠如や、巨視的社会学のレベルにおける説明の貧困さを指摘する (Peter Leonard 1975:52)。

Moreau (1979) では、諸個人が変わらないまま政治経済システムを変えることは、政治・経済構造における

一致した変革を同時に試みることなしに真空管で我々自身を変えようとする事と同じであり、意味がないと述べている。

Moreau (1979) は、社会的疎外と社会的犠牲についての心理社会的過程を重視してとりあげている。これらの心理社会的過程は、人間のニードに一致する個人的、対人関係的なものというよりは、すべてが利潤の蓄積と維持にかかわり組織化された社会において、人々の間で支持され、維持され、合法化されるものと捉えられる。職場や家族、学校、教会、社会機関、官僚制、社会の様々な接触においてみられる社会的疎外について、それを打ち破るのがソーシャルワークの挑戦であるとしている。心理社会的過程の捉え方においても、統合的アプローチを用いつつも、マルクス主義の視点に基づく社会システム分析がつかぬかたれている。

### 3) ソーシャルワークにおける意識向上運動

Moreau (1979) は、構造的ソーシャルワークの中心的な目標は、クライアントが社会的プラクシス (Paulo Freire) を展開することができるよう援助することであると考えている。それはクライアントが個人的・政治的状況を批判的に振り返ることができるよう促し、結果として個人的・政治的行動計画を展開していくのを助けるとされる。これは実践のなかでクライアントと一緒にラベリングの過程にある要素を調べ、ラベリングによって誰が利益を得て、誰が被害を被るのか、批判的思考を行うことを意味する。この課題は教育的なものと考えられている。

批判的意識の展開的アプローチに関して、P. Leonard (1975: 53-4) は、教育分野における Paulo Freire の業績をソーシャルワークに応用する可能性について述べている。Paulo Freire の関心は、ラテン・アメリカにおける大衆の解放教育にあった。それはプラクシス (praxis; 練習、実習、習慣)、現実の批判的振り返り (critical reflection)、その後の行動を発展させる教育過程からなる。批判的な意識の発達こそが、大衆が現実を変えていくこの枠組みの本質的な部分とされる。解放の教育は、意識向上運動とされ、ラテン・アメリカでは、意識向上運動の概念は、ソーシャルワーク実践と教育に深遠な影響をもたらし、ソーシャルワークの再概念化を起こしたといわれる (Peter Leonard 1975: 54)。

Moreau (1979) は、P. Leonard (1975) が適用した Paulo Freire の解放の教育を、構造的ソーシャルワークの中心的な目標のなかに取り込んだ。Paulo Freire のプラクシス praxis や、現実の批判的振り返り (critical

reflection) は、構造的アプローチの方法に深く浸透している。以上が、ラディカル・ソーシャルワークのパラダイムを構成する3つの要素に関する記述である。

### 3. ラディカル・ソーシャルワーク実践の枠組み

Peter Leonard (1975: 55) は、ラディカルな実践の枠組みを構成する脈絡、目的、方法について表している。P. Leonard (1975) の論文で示されているラディカルな実践の枠組みを振り返っておくことは、Moreau (1979) が構築した構造的アプローチを理解する上で、欠かせないものと考えられる。

#### 1) ラディカル・プラクティスの脈絡

まず、ラディカル・プラクティスの脈絡については、①反駁、②人々とシステムの弁証法/相克 (dialectic)、③諸システム：抑圧的なものと支持的なもの、④個々人の意識、の小見出しによって示される内容から構成されている (Peter Leonard 1975: 55-6)。

①反駁：資本主義社会のもとでソーシャルワークは、資本主義経済生産制の非人間化から生ずる反駁にちょうど位置する社会福祉制度の部分で働く。ソーシャルワーカーは、人と社会的環境の相互作用や、政治的・経済的構造に対する人々による統制を高めるよう働きかける。

②人々とシステムの弁証法/相克 (dialectic)：人間は創造し、また、社会的世界によって創造されるが、ソーシャルワークの脈絡は、人々の創造的、決定的、潜在的な可能性を高める機会を提供する。

③諸システム：抑圧的なものと支持的なもの。人々が相互作用し、ソーシャルワーク介入の焦点である社会環境は、抑圧の源泉でもあり、支持の源泉ともなる諸システムからなる。

④個々人の意識：社会的環境における人々とシステム間の相互作用についての理解は、それぞれ個々人の意識や、個々人にとって社会的状況の意味するところや、個々人にとっての痛みや苦痛、望みや絶望についての認識が含まれる。ソーシャルワークでは、ワーカー自身が、抑圧する側としての自身を見出すことは、抑圧された者との連帯に導かれるためにも大切である。

ソーシャルワーク実践の脈絡についての上述の理解は、主流派ソーシャルワークにおいてはほとんど考慮されずにいるが、新たな親密圏や公共性を生成するための実践には、このソーシャルの脈絡に関する理解は欠かせないものである。

## 2) ラディカル・プラクティスの目的

次に、ラディカル・プラクティスの目的としては、①教育、②人とシステムを結びつけること、③対抗システムを構築すること、④個別的反応と構造的反応が示される (Peter Leonard 1975: 57-9)。

①教育：資本主義社会において、ラディカル・ソーシャルワークの目的は、経済的生産制の結果生じた個人的困窮を緩和し、抑圧的な社会システムに抵抗・克服する闘いを他者と共に行うことであり、ラディカルな実践の鍵となる課題は、人々の発達 (development) に貢献することを目的とする教育的なものである。

Moreau (1979: 82) のなかでも同様に、ソーシャルワークに対する構造的アプローチの目的において、教育的なものが重要な課題とされている。

②人とシステムを結びつける：人々の環境のなかで人々と様々なシステムとの間の相互作用に焦点化する際に、ラディカルな実践は、人々の利益に役立つよう諸個人と諸システム間を結びつけるねらいがある。依存と相互依存、階層と平等、教化と対話、これらの社会関係の背後に述べられていない仮定についての気づきを増やすことが目的である。

Moreau (1979: 85) は、構造的介入における機関とクライアントの関係をどう捉えるかという文脈で、その関係は権利としてなのか、恩恵としてなのか、支援としてなのか、規則としてなのか、という問いで取り上げている。

③対抗システムを構築する：ラディカルな実践の目的は、既存のシステムの内側か外側で、対抗システムの構築を助けることである。そのようなシステムの構築は、既存のシステムのなかでのいくつかの変化が達成され、短長期的にそのようなシステムがラディカルに転換され廃棄されうるようなところから、権力基盤を発展させることをねらう。

Moreau (1979: 87-9) は、同様に、対抗システムの構築について述べている。また、社会機関における構造的ソーシャルワークの限界についても書いてる。第一線の実践者はクライアントにもっとも身近に接近し、クライアントが直面する問題にアプローチできることから、社会問題を定義する際に、強調すべき代案となるデータを収集する機会が与えられていると述べ、このことはソーシャルワークの行うことと考えることとの分裂を防ぐものであると説明している。

④個別的反応と構造的反応：既存の社会福祉システムにおけるラディカル・ソーシャルワークの目的は何

であるべきか。直接サービスは、既存の構造を暗黙に支持する短期の改良的な介入であることを認めなければならない。たとえそうだとした場合、福祉サービスの受給者の批判的意識を高め、サービス自体の変化を実現していく権力基盤をつくりあげる活動を伴うということである。

ソーシャルワークの目的には、人々の発達に貢献する教育が鍵として揚げられる。また、人とシステムをつなぐためには、相互依存、平等、対話による相互作用が重視される。対抗システムを構築するための権力基盤の発達も視野に含まれる。これらのことは、次に述べる実践方法に反映される。

## 3) ラディカルな実践の諸方法

次に、ラディカルな実践の諸方法について、①対話、②グループの意識向上運動、③組織化と計画化によって、説明される (Peter Leonard 1975: 59-60)。

①対話：ラディカルな実践の目的が教育にあるならば、それを達成する方法は、ワーカーと人々との対話による意識向上運動の過程を通してである。権威主義的、抑圧的な関係性ではなく、対話的關係を発展させ、他者と我々の社会的世界の知覚を交換することから、対話が始まる。

②グループの意識向上運動：変革を達成するための「行動システム」における人々（「クライアント」や他者）と一緒に働くことは、ラディカル・ソーシャルワーカーにとって、批判的意識を発達させる主な方法であり、グループはその中心的なものである。グループの批判的意識の発達から、行動システムにおける戦略を検討していくことが可能となる。

Moreau (1979: 87) は、個人主義的ケースワーク実践よりも、個人的に経験している共通の葛藤を共有する結びつきや、権利擁護のための組織化をめざし、対抗システムの組織化を支援していくことについて述べている。

③組織化と計画化：諸個人、家族、集団居住施設、大組織など、組織的、行政的、計画のスキルを発展させなければならない。

P. Leonard (1975: 61) は、ラディカルな実践の分析的・規範的枠組みを示すことで、ソーシャルワークの現場と教育の開発を支援するための理論と実践の一貫したパラダイム形成に向けて進むべき道筋を示した。Moreau (1979) の論文の重要な考え方の背景には、P. Leonard (1975) のラディカルな実践の分析的・規範的枠組みが色濃く反映されていることを確認した。

#### IV. まとめ

ここでは、構造的ソーシャルワークの先駆けとなった Moreau (1979) の論文をたどるなかから、新たなパラダイムの萌芽がみられた当時のソーシャルワークを振り返った。P. Leonard (1975) の論文の内容を詳細にみながら、P. Leonard (1975) のラディカル・ソーシャルワーク実践の分析的・規範的枠組みが、Moreau (1979) の構造的アプローチに与えた影響がどのようなものであったかを確認することができた。

構造的アプローチがカナダで発展し、今日のカナダのスクール・オブ・ソーシャルワークの教育プログラムの中心に据えられてきた発展過程については、さらに多くの文献にふれて掘り下げるとともに、現地での調査も必要と考える。

構造的ソーシャルワークは、分析的思考と批判的アプローチによって、個人的諸問題と社会的諸問題の構造的脈絡および、ソーシャルワーク実践自体の構造的脈絡を検討するものである。構造的脈絡は、諸個人と政治的、経済的、社会的諸関係のダイナミックスや権力にかかわっている。

構造的ソーシャルワークを検討することは、わが国におけるソーシャルワーク教育を批判的にとらえ返し、新たな親密圏や公共性を生成していくための実践に寄与しうる代案としての教育プログラムを創造していく課題の提起につながるものと考え。もっと具体的な取り組みのなかでこの課題を掘り下げて検討していくことを考えていきたい。

本研究は、科学研究費補助金（基盤研究(C)課題番号：20530516）を受けて実施した研究の一部をまとめたものである。

#### 注

1) [http://www.carleton.ca/ssw/intnl\\_stud\\_handbook.htm](http://www.carleton.ca/ssw/intnl_stud_handbook.htm) (2009/04/14)  
The Carleton University International Student Handbook and the School of Social Work BSW and MSW Handbooks. カールトン大学スクール・オブ・ソーシャルワークが、国際留学生のために作成した冊子。この冊子は Rashmi Luther の指導のもと、リサーチ・アシスタントの Alice Mitchell によって用意された。

#### 参考・引用文献

- Bailey, Roy and Mike Brake, eds. (1975) *Radical Social Work*. New York: Pantheon Books.
- Carniol, Ben (1992) *Structural Social Work: Maurice Moreau's Challenge to Social Work Practice*, *Journal of Progressive Human Services*, Vol. 3 (1), 1-20.
- Freire, Paulo (1972) *Pedagogy of the Oppressed*, Penguin, (=1979, 小沢有作・楠原彰・柿沼秀雄・伊藤尚訳『被抑圧者の教育学』垂紀書房.)
- Galper, Jeffrey H. (1975) *The Politics of Social Services*, Prentice-Hall, Inc. (=1980, 右田紀久恵・井岡勉・宮田和明訳『変革の社会福祉』ミネルヴァ書房.)
- Goldstein, H. (1973) *Social Work Practice: A Unitary Approach*, Columbia: University of South Carolina Press.
- Leonard, Peter (1975) *Towards a Paradigm for Radical Practice*, edited by Roy Bailey and Mike Brake, *Radical Social Work*, Pantheon Books, New York, 47-61.
- Moreau, Maurice (1979) *A Structural Approach to Social Work Practice*, *Canadian Journal of Social Work Education*, 5, 1, 78-94.
- Mullaly, Bob (1997) *Structural Social Work Ideology, Theory, and Practice*, second edition, Oxford University Press.
- Pincus, Allen, and Ann Minahan (1973) *Social Work Practice: Model and Method*. Itasca, Ill.: F. E.
- Throssell, Harold, ed. (1975) *Social Work: Radical Essays*. St. Lucia, Queensland: University of Queensland Press.